東欧ハプスブルク帝国の
初めの神聖ローマ帝国三皇帝

フェルディナント１世，マクシミリアン２世，ルドルフ２世

倉　田　　稔

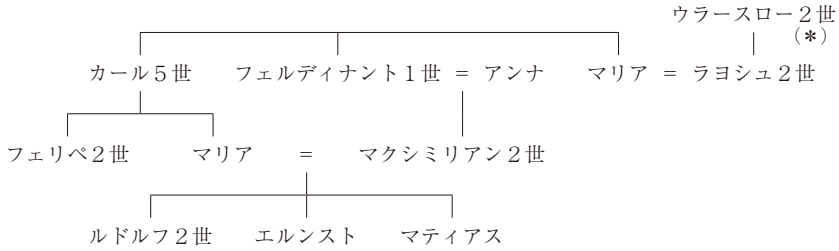
目次

はじめに
モハーチの戦いまで
　フランス　ハンガリーでの三つ巴の戦い　モハーチの戦い
フェルディナント１世
　ハンガリー　フェルディナントの治世
マクシミリアン２世
ルドルフ２世
　マニエリスム　錬金術　ルドルフの長男　ティコ・ブラーエ
　ヨハネス・ケプラー　リヒテンシュタイン
　ジュゼッペ・アルチンボルド
結び

はじめに

中期ハプスブルク時代に，スペイン系ハプスブルクと東欧系ハプスブルクに別れた。神聖ローマ帝国皇帝はその東側が受け継いでしまい，一方，スペイン系ハプスブルクは没落してしまう。その東欧系ハプスブルクの初めの三代の皇帝を描く。

ハプスブルク系図



（＊）ヤギェウォ家のボヘミア王・ハンガリー王

モハーチの戦いまで

神聖ローマ帝国皇帝となるハプスブルクのマクシミリアン１世[1]は，妃・ブルゴーニュ家のマリーを事故で失ってから，ミラノのスフォルツア家のビアンカ（1472－1512）と1494年に持参金目当てで再婚していた。彼女はガレアッツオ・マリーア・スフォルツア[2]の娘であった。

マクシミリアン１世の行った二重結婚は，息子フィリップ美公とスペインのフアナ[3]とであり，その間に孫としてカール[4]とフェルディナントとマリアなどがいた。もう一方は，娘のエリザベートとスペインのフアン王子とであり，子供はなかった。

1506年に，ヤギェウォ家のボヘミア王・ハンガリー王・ウラースロー２世が亡くなり，息子・ラヨシュがボヘミアとハンガリーの王になった。時に10才だった。彼とアンナとの母は同じくアンナといい，教養のある人であって，出産で亡くなった。

マクシミリアン１世は，その孫のフェルディナント（1503－64）と孫のマリアの二重結婚を1515年に決めた。相手は共にヤギェウォ（あるいはヤギレオ）家であった。１つが，そのウラースロー（＝ヴラジスラフ）２世の息子・ボヘミア王でハンガリー王のラヨシュ２世とわが孫マリアの結婚である。２つが，ウラースローの娘アンナ王女（ラヨシュの姉）とわが孫カールあるいはその弟フェルディナントとの結婚である。ヤギェウォ家の側ではアンナを

兄カールと結婚させたがった。アンナもそうだった。というのは，スペイン王その他の王カールは，将来皇帝になる人だったからである。アンナは10才でハプスブルクの兄か弟と結婚することとなったが，兄弟のどちらかは未定だった。とりあえず代理結婚はした。(5) アンナはフェルディナントと婚約する。カールは1526年にポルトガルとアラゴンの王女イサベルと結婚した。いとこ結婚である。マクシミリアン１世は，アンナとラヨシュをウィーンに呼んで育てた。マクシミリアン１世はデューラーを庇護した。

カール５世は，バルバラ・ブロムベルグとの間にドン・ファン・デ・アウストリアをもうけ，ヨハンナ・ファン・デル・ヘインストとの間にマルガレーテをもうけた。(6)

カール５世は，カルロス宮（ルネッサンス様式）をアルハンブラ宮殿に接して作った。またブリュセル，バリャドリッド，フランクフルト，アウグスブルグ，ナポリなどに宮殿を作った。彼は皇帝戴冠式を1530年にローマでなくボローニャで行った。

カール５世は，1545年にフェリペをもうける。夫婦は愛し合った。庶子マルゲリータはオーストリアのエリザベートに育てられた。カール５世は画家ティチアーノを気に入り，宮中伯にする。

フェルディナントは，スペイン・カスティーリア生まれで，祖母イサベラによってスペインで育てられた。祖父フェルナンドは彼を可愛がった。彼は陽気で快活であった，1516年に彼はオーストリアへ行き，逆に兄カールがスペインに来ることになった。カールはスペイン育ちではない。1521年に祖父マクシミリアン１世皇帝の遺産分割で，カールがハプスブルクの西側の諸国を，つまりスペイン等を，フェルディナントがオーストリアを相続することになった。そして，フェルディナントは前出ヤギェウォ家のアンナと結婚したのである。スペイン王となったカールは皇帝になる。カールと妹マリアとはベルギーで，マクシミリアン１世の娘・つまり叔母・賢いエリザベートに育てられた。

1519年，スペインへ来た兄カールと弟フェルディナントは初めて会った。

1622年，フェルディナントは，アンナ・ヤギェウォと結婚し，生涯愛し合うことになる。フェルディナントは敬虔で，アンナが初恋だった。アンナは初めフェルディナントを愛したわけではなかったが，彼が誠実にアンナを愛してくれるので，信頼し，愛するようになった。こういう時代に珍しいことだった。アンナは信心深く思慮深かった。２人の結婚後の翌年，妹マリアとラヨシュが結婚する。フェルディナントと妹マリアは初めてオーストリアで会うのだった。

フランス

フランスのランソワ１世（1494－1547，在位 1515－1547）は，ヴァロア家の人で，フランソワの母は，サヴォア家であった。カール５世とヘンリー８世の時代の人である。彼はアングレーム伯となった。ルイ12世と王妃アンヌ(・ド・ブルターニュ)との間に生まれたクロードと，1514年に結婚した。翌1515年にルイ12世が死んだので，王に即位した。フランソワ１世は人文主義の教育を受けた。この最初の結婚は国王の座を狙ったものである。クロードは王妃になる。イギリスの有名なアン・ブリン（ヘンリー８世妃）とその姉はクロードに仕えた。クロードは多産で，厳格だった。1524年に死去した。フランソワ１世の公式愛人は２人だった。

フランソワ１世は1519年，皇帝選挙に出て，負ける。彼は多情だった。愛人としてブルターニュ公妃フランソワーズを誘いだそうとする。結局，成功し，承諾させ，10年間愛妾とする。

イタリア領有に野心をもつフランソワ１世が，一万の兵でパリを出発し，リヨンを経，アルプスを越え，イタリア戦争を進めた。1515年，マリニャーノの戦いに勝利し，ミラノを占領し，スフォルツア家を追放した。スフォルツア家にはレオナルド（ダ・ヴィンチ）が仕えていた。1516年，フランソワ１世はレオナルドを雇ったのである。レオナルドがフランスに来て，クロ・リュセ城に住む。フランソワ１世は，アメリゴ・ヴェスプッチのスポンサーにもなる。

フランソワ１世は，南下し，パヴィアを攻めた。フランソワ１世はカール５世と対抗するため，何とトルコと組む。しかしフランソワ１世はカールに大敗し，1525年に捕虜となった。彼はマドリドへ幽閉された。スペインとフランス，このカトリック両大国が戦ったので，プロテスタントが伸び，その上，オスマン帝国はウィーン攻撃をした。ヨーロッパでは1521－44年は，イタリアを巡る戦いの時代であった。

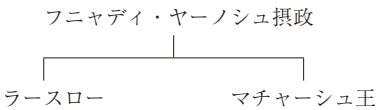
フランスでは，王の母ルイーズ・ド・サヴォイが政務を執り，事もあろうに，イスラームのオスマン帝国に息子の解放のため支援を求め，同盟を求めた。時の皇帝スレイマンはそれを歓迎した。

マドリドでフランソワ１世は牢獄につながれたわけではなく，カールの姉エレオノールを口説く。彼は，こども２人を人質にして本人は帰国する。彼の宮廷に若いアンヌが登場し，公式愛妾になる。前出の愛人フランソワーズは去る。フランソワ１世は２度目の結婚をする。スペインのエレオノーレである。だが愛人ディアーヌ・ポアチエが登場する。1547年，フランソワ１世は没する。エレオノールはスペインへ帰る。

フランスではシャルル８世，ルイ12世，フランソワ１世と王位が移り，共にイタリア戦争を仕掛けたのだった。

ハンガリーでの三つ巴の戦い

15世紀，ハンガリー王国に，トランシルヴァニア（＝ジーベンビュルゲン）のフニャディ家のマチャーシュ１世が出て，全盛期をなした。マチャーシュ１世のハンガリー軍は，1485年にウィーンを占領した。



マチャーシュ１世（1443－1490，位 1458－1490）は，ボヘミア王にもなった（位 1469－1490）。彼はフニャディ・マチャーシュ，またはマティアス・

コルヴィヌス，マチャーシュ・コルヴィン，フニャディ・マチャーシュと言われる。マチャーシュの最初の妃はボヘミア王の娘カテジナ，つまりカッタリナで，1461年に結婚した。２番目がナポリ王の娘ベアトリーチェ，またはベアトリクスである。マチャーシュ１世にはこの二人の間に子はいない。だがマチャーシュ王には庶子がいた。コルヴィン・ヤーノシュ（1473－1504）である。

マチャーシュ王の年表

1456　父ヤーノシュ没。
1458　マチャーシュ，ハンガリー王になる。
1461　スロヴァキアのギュフク・ヤーノシュを破る。
1465　教皇からボヘミアの出兵を要請さる。
1468　ボヘミアへ出兵，モラヴィアを占領。
1471　ボヘミアに再出兵。
1479　オロモウツの和約で，ハプスブルクからオーストリアの支配権をえる。
1479　オーストリア大公国の支配権も得た。
1485　ウィーン占領。
1490　ウィーンで没。

マチャーシュ王の副王はサポヤイ・イシュトヴァーンであった。マチャーシュ王は1490年に急死した。その後，貴族たちが勢力を盛り返す。彼らは農民を農奴として扱い，そのため各地で反乱が起きる。代表例は1514年のドージャに率いられた農民一揆である。

ドージャ・ジェルジ（1470－1514）は，トランシルヴァニア出身である，反トルコ十字軍の組織をハンガリー大法官に命じられ，農民軍を数十万人集めた。しかし地主勢力は，収穫期に帰郷しない彼らの妻子を虐待した。そのため農民は反乱した。ハンガリー王，ウラースロ２世時代である。大司教バコーツは宮廷党を率いる。反乱鎮圧の後，ハンガリーでは，貴族の自由と農

奴の隷属がきまった。

マチャーシュ王の２度目の妻が王妃ベアトリクスであった。次の王は，庶子コルヴィン・ヤーノシュの予定だったが，ならなかった。というのは異義が出たのだ。王妃ベアトリクス，マクシミリアン１世，ボヘミア王ヴラディスラフ，ポーランド王ヤゲロ家のヤン・オブラフトからである。ヤン・オブラフトとマクシミリアン１世は武力で王位要求をしたが失敗した。だがウラディスラフはオーストリアを放棄し，マクシミリアン１世のハンガリー王位への権利を認めた。

議会は，ヤギェウォ朝の国王を迎える。ヤギェウォ家のポーランド王カジェミェシュ４世の長男であるボヘミヤ王ヴワディスラフ（＝ウラースロー）がハンガリー国王となった（位 1490－1516）。このウラースロー２世（1456－1516）は，ボヘミア王（位 1471－1516），にもなった。

ウワディスラフ（ウラースロー）は王妃としてベアトリクスを娶るとした。マチャーシュ王の２度目の妻で，前王妃である。ナポリ公アラゴンのフェランテの娘だった。だが，彼女はだまされて，結婚されず，帰国した。

ウラディスラフは，大貴族，大司教，司教に国庫を利用された。高僧・官僚が宮廷党をつくり，サポヤイ・イシュトヴァーンと大貴族は貴族党を作り，争った。サポヤイは王位を要求し，ウワディスラフの政府はハプスブルクに助けを求めた。ウワディスラス２世と宮廷党はハプスブルクに依存していた。

サポヤイが死ぬと，上の息子ヤーノシュが貴族党の指導者になった。

1506年，ウワディスラフに嫡子が生まれてしまった。

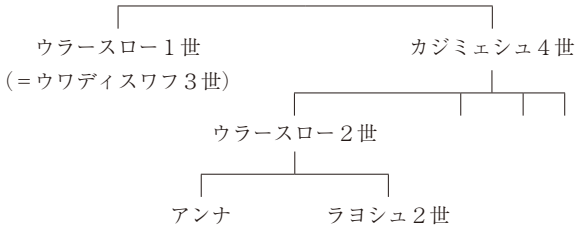
フッガー家はハプスブルクに大いに金を貸していた。初めチロルの銀鉱経営をした。フッガー家はハンガリーに食い込み，1494年，鋳物工場を多数設置した。フッガー家は鉛鉱を造った。ウワディスラスの王国の鉱山はフッガー家を富ませた。ハプスブルクとフッガー家が組んだ。両者はハンガリーとボヘミアで力を持ち，ヤギェウォ家からハプスブルクへ王冠が移るのだった。

ヤギェウォ朝は，初めはリトアニア大公，その後ポーランド王，ハンガリー王，ボヘミア王になる。ハンガリー王として，ウラースロー１世，２世，ラ

ヨシュ２世がでたわけである。

ヤギェウォ家のラヨシュ２世と妃マリアは愛し合った。ラヨシュ２世は10才で王になった。ハンガリー王（1516－1526），そしてボヘミア王（同年）としてルドヴィーク１世と名乗った。

ハンガリーのヤギェウォ朝系図



オスマン・トルコの皇帝，第10代皇帝スレイマン１世あるいは大帝（1494－1566，在位 1520－1566）[7]は，セリム１世の息子である。スレイマンは，1520年に父の後を継ぎ，即位した。妃の１人がヒュッレムであった。彼は46年の統治のうち，13回も遠征した。法典を整備した。1521年から外征を始めた。

1456年以来国境を侵さなかったトルコが動いた。シュレイマン１世の前にはオスマン・トルコはヨーロッパに背を向けていた。シュレイマン１世が再びヨーロッパに向かった。1521年，トルコはフニャディ・ヤーノシュが守り抜いたベオグラードを攻略した。ベオグラード（＝ナーンドルフェヘールヴァール）が墜ちる。ここにイエニチェリ（オスマン・トルコの近衛騎兵隊）を常駐させた。マチャーシュ王の死後，ハンガリー勢力は分裂していた。

皇帝スレイマンは，1521年，ハンガリー王国に朝貢を要求し，毎年使者をオスマン帝国に送るよう求めた。それをラヨシュ２世ははねつけた。トルコの使者の首をはね，その首を送り返した。スレイマンは怒り，それからヨーロッパを攻め，ハンガリー王からベオグラードを奪うことになる。このころ彼は一方的にヴェネチアに増税を決め，ヴェネチアは怒っている。スレイマ

ンはロードス島との戦いを優先し，1522年にロードス島を奪う。これで東地中海の制海権を得た。義弟のイブラヒム・パシャを大宰相に抜擢し，イブラヒムも有能だった。ロードス島攻撃のため，ハンガリー攻撃は遅くなったが，1526年，スレイマンはイスタンブールを出陣し，ハンガリーに進軍した。(8)

モハーチの戦い

1526年，モハーチの戦いがおきた。トルコがハンガリー国境を越えて攻め込んだ。フェルディナントの義弟・ボヘミア王・ハンガリー王ラヨシュ２世は，対オスマン・トルコとの戦い，つまりモハッチの戦いに臨んだ。ハンガリー軍，ラヨシュ２世は２万５千の兵をもった。８月29日激突した。モハーチ平原は，現ハンガリーの南端で，ドナウ河に沿っている。オスマンの軍は６万人であった。ラヨシュは，血気にはやり，援軍２万人を待たず，ハンガリーの伝統的な騎馬団で戦い，オスマン軍は大砲を300門持っていた。オスマン軍はハンガリー騎士団をおびき出し，その後，大砲で攻撃した。トルコの砲火とイエニチェリの攻撃の前にハンガリー軍は壊滅した。16時ころ始まり，戦闘は１時間半で決着がついた。ハンガリー軍が総崩れとなり，ラヨシュは撤退しようと，敗走した。チェレ河を渡ろうとし，馬から落ちて溺死した。この戦いでヤギェウォ家は断絶する。

フェルディナント１世

ハンガリー

モハーチの戦い後，トルコの驚異が増した。オスマン軍は，モハーチの戦いで勝利し，９月，ブダを占領し，ハンガリー中部を占領した。ハンガリーは大部分がオスマンのものになり，一部がトランシルヴァニアのサヴォヤイ・ヤーノシュのものになり，残りの一部は，ハプスブルクのものになる。フェルディナントは義弟・ラヨシュ２世に代わり，ボヘミア王・ハンガリー王になった。これは，その後，ハプスブルクが東方帝国を得て，大帝国にな

るきっかけとなる。(9)

３地域の分割は，中央部・南部をオスマン帝国ハンガリー，北部をハプスブルク領（王領ハンガリー）。東が東ハンガリー王国，ただしオスマンを宗主とする，となった。18世紀には全域がハプスブルク領になるのだが。オスマン帝国以外に２王朝が対立した。

サヴォヤイ・ヤーノシュ（1487－1540，在位 1526－1540）は，トランシルヴァニアの豪族で，ハンガリー最大の貴族であり，１世を名乗り，王位（対立王位）についた。父は，サポヤイ・イシュトヴァーンである。

バコーリの没後，副王バートリー・イシュトヴァーンが宮廷党を率いた。しかし副王とその宮廷党，マリア太后は，対立議会を招集し，フェルディナント（位 1526－64）を選出した。サポヤイはフランス王の支持を求めたが，援助を得られなかった。

フェルディナントは，フッガー家の資金で軍を組織し，サポヤイをハンガリーから追い出した。サポヤイはポーランド王のもとに逃げた。つぎにサポヤイはスルタンの庇護の下に入ることとし，スレイマンは認めた。

フェルディナントが新しく二つの国王になったが，ハンガリーでは外国人フェルディナントが王位につくのを嫌がった。オスマン軍はハンガリー中央部を平定した。トランシルヴァニア（＝ジーベンビュルゲン）の領主サポヤイ・ヤーノシュがハンガリー王として即位し，対立王となった。その際，オスマン帝国がその後ろ盾になった。だからトランシルヴァニアにはハプスブルクの力が及ばなかった。ハプスブルクと対峙したオスマン・トルコは，1529年，ウィーンを包囲した。ハプスブルクもペルシャと手を組もうとした。

1529年，シュレイマンは第一次ウィーン攻撃をし，占領できなかったが，サポヤイはトルコの庇護の下，ハンガリーに復帰した。フェルディナント派は小さくなった。ウィーン攻撃は成功しなかったが，東洋の大国がヨーロッパの入り口まで攻めてきたことは恐怖となった。1529年のウィーン攻撃は，ハプスブルクがボヘミヤ王，ハンガリー王をとったからだ。1547年まで休戦協定がされた。

以後150年, ハンガリーの中央から南部はトルコの支配下に入った。一方, ハンガリー王国は北西部だけ確保し，ポジョニ（スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ）に首都をおいた。フェルディナント１世がハンガリーとボヘミアの国王となる。ハンガリー東部はトルコの保護の下，トランシルヴァニア公国を造った。1526－1699年まで，ハンガリー中央部と南部はトルコが占領した。スルタンはブダに入城したが，すぐひきあげた。サポヤイ指揮下のハンガリー軍がまだ残っていたからだ。

サポヤイ・ヤーノシュとハプスブルクが統一すれば，トルコと戦えたが，共に王位の為に競った。ハンガリーはこうして，トルコとハプスブルク２つの権力に挟まれた。

ラヨシュの妃マリアは，その後，再婚しなかった。彼女はネーダーランド総督になったことがある。フェルディナントとアンナは，この時代には珍しく，自分たちで子供を育てた。

スルタン（皇帝）は1532年にも再びオーストリアに遠征をおこなった。しかし補給線が伸びず，ウィーンまで進めない。その中でサポヤイとハプスブルクはお互いに戦っていた。だが1533年に和睦した。ハプスブルク側はヤーノシュの王位を認め，貢納金を支払うこととなった。

サヴォヤイ・ヤーノシュ１世は，イザベラと結婚し，1540年に１人息子ヤーノシュ・ジグモンド（在位 1540－1571）が生まれ, 本人はすぐ亡くなった。未亡人イザベラは，1550－1559年にハンガリー女王を名乗った。幼子ヤーノシュ・ジギスムンドが国王（位 1540－71）になる。サポヤイの妻イサベラはポーランド王の娘である。ハンガリーを統治するのは，オスマンの支持をうけていたフラーデル・ジョルジ枢機卿と，母イサベラ（1559年没）だった。

トルコのハンガリー攻撃は，1683年まで何度か行われたが，ウィーンまで進めなかった。1538年スレイマンは，スペイン，ヴェネチア，ローマ教皇，オーストリア連合艦隊をプレヴェザの海戦で破り, 地中海の制海権を握った。

スレイマン１世の時代，オスマンはマルタ島をとり，アルジェリア，チュニジアが帰属し，地中海の制海権はオスマンのものとなった。1541年ブダとペシュトもトルコ軍に占領される，

幼いヤーノシュ・ジグムンドが国王になると，1540年，これに対してハプスブルクのフェルディナントはブダを攻囲した。1541年，オーストリアはブダ奪回を試みた。だがことごとく失敗した。1541年，スレイマンは，自分の庇護下の国王のために進軍した。ハプスブルクは退散し，ブダとハンガリー中西部はトルコの手に残った。

1547年，カール５世と弟フェルディナント国王は，オスマン帝国と休戦し，和平した。このとき，課金を約束された。毎年３万ドカーテンを払うことになった。ハンガリーにプロテスタントがかなりいた。トランシルヴァニアにはハンガリー貴族のバートリ家が支配していた。ハンガリー大貴族はこれで２大国，トルコとハプスブルクの道具になった。

東部ハンガリーがヤーノシュ・ジグムンドに割譲されたさい，トルコに年貢を納めることになった。幼い王の下で，クロアチア出の司祭マルティヌジ・ジョウジュが生前から国王サポヤイから妻と子の将来を託されていた。ハプスブルクは1542年，ブダを奪還に失敗する。マルティヌッジはハプスブルクの分遣隊に殺された。トルコは復讐した。1552年，トルコの大軍がハンガリーを攻めてきて，ほぼ支配下に置いた。1552年以降は南ハンガリーはトルコ支配のままだった。

1556年，トランシルヴァニア議会はイザベラ太后とヤーノシュ・ジグムンドを呼び出し，ほぼトランシルヴァニアだけの支配者とした。

1559年，イザベラ太后が没し，バートリー・イシュトヴァーンが国王の名の下で政治を握る。[10] ヤーノシュ・ジグムントは1570年にマクシミリアン２世の王位を認めた。彼は初代トランシルヴァニア公になった。彼は翌年死去し，後継争いが起きて，バートリー・イシュトヴァーン（1533－1586）がトランシルヴァニア王（1571－1586）になった。またの名シュテファン・バートリである。ポーランド・リトアニア共和国の共同統治者（位 1576－

1586）となる。

その後，スレイマンは，対サファヴィー朝に対し東方遠征をし，バグダッドを占領し，南イラクとアゼルバイジャンを取った。３回目の遠征で，アゼルバイジャンは失う。その責任をとらされ，宰相イブラヒムは処刑となった。アルジェのバルバリア海賊のハイレッディンが帰順し，スレイマンは彼をパシャにし，アルジェが領土となった。これで西地中海の制海権も半分手に入った。

フェルディナントの治世

フェルディナントはハンガリー王になった。サポヤイ・ヤーノシュが他方でハンガリー王に立てられ，その後，その子が立てられる。

フェルディナント夫妻は４男11女をうむ。フェルディナントはいつもアンナと一緒だった。浮気をしなかった。1547年，妃が産褥熱で死す。フェルディナントは，ショックで沈みがちになり，別人のようになった。

カール５世の皇帝軍がフィレンツェを包囲し，共和国フィレンツェは崩壊し，フィレンツェ公国となる。カール５世は，アレッサンドロ・メディチを初代フィレンツェ公にし，娘・庶子マルガレータを1535年に同公に嫁がせた，しかし1537年，公が従弟のロレンツイーノに暗殺され，彼女は15才で寡婦になった。その後，パルマのオッタヴィオ・ファルネーゼと1542年に再婚させた。彼女は建築好きであった。ピアツェンツァにパラッツオを作るが，未完成となった。1559年にネーダーランドの総督に任命される。

その後，マルガレータの息子アレッサンドロ・ファルネーゼはレパントの海戦で将軍の１人として参戦した。その時の最高指揮官はドン・ファン・デ・アウストリア[11]である。彼もカールの庶子である。後年，ドン・ファンがネーダーランド総督になり，ファルネーゼは1577年に彼のもとに赴任した。ドン・ファンが急死し，後任になる。だが1591年に死んだ。

フェルディナントは，プラハにベルヴェデーレ宮を1538年から建てる。これは愛する妃のためであった。彼は，カール５世が引退した時から神聖ローマ帝国皇帝（1556－64）になり，フェルディナント１世を名乗る。その後，後継はフェリペ２世(カールの息子)にせよという兄カールとの約束を破る。

フェリペ２世は，初めマリア・マヌエラと結婚し，いとこ同士であり，愛し合った。ドン・カルロスが産まれ，マリアはすぐ病死する。その後，フェリペ２世は，カールの命令で，イングランドのメアリー１世と結婚し，メアリーも病死する。彼はそこでエリザベス１世に求婚し，断られる。宗教が違うから無理だった。

1562年，フェリペの息子17才のドン・カルロスは，在学中に大けがをして重態になっている。ルドルフ２世はドン・カルロスに会っている。

フェリペ２世は，ついで，フランスのエリザベート・ド・ヴァロワと1564年に結婚した。彼女はフェリペの長男ドン・カルロスと婚約の話もあった。それが相手が父のフェリペとなった。

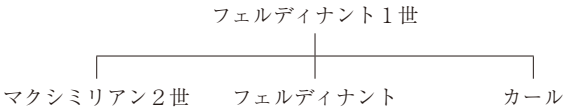
ドン・カルロスの逃亡計画があった。1568年，フェリペ２世はドン・カルロスを幽閉した。フェリペは，ドン・カルロスの逃亡先をネーダーランドと思い込む。1568年７月28日，ドン・カルロスは死す。(12) エリザベートは，1566年にイサベルと1567年に次女カタリナを生み，３番目の出産で1568年に死す。

1580年「令名高きウィレム公の弁明ないし擁護」で，ウィレム・ファン・オランエ(13)は，フェリペ２世が妻エリザベートとドン・カルロスを殺したと書く。（ランケ『ドン・カルロス伝』）もちろん前者についてはそんなことはない。フリートリヒ・シラーは，サンレアルの「ドン・カルロス伝」をもとに戯曲を書く。戯曲は長いので，台本では短くなった。

フェルディナント１世は，子供を15人もち，成人したのは10人だった。一女エリザベト（1526－1545）は，ポーランド王ジグムント２世妃となった。一男がマクシミリアン２世（1527－1576）で，皇帝になる。二女アンナ（1528

－1590）はバイエルン公アルブレヒト５世妃になる。フェルディナント２世（1529－1595）はチロル領主。マリア（1531－1581）は，ユーリヒ・クレフェ・ベルグ公ウィルヘルム５世の妃になる。マグダレナは，ハル女子修道院長，アタハーナ，エレオノーレ，マルガレーテは修道女，ヨハン，バルバラ，カール２世，ウルスラは，夭折し，ヘレーナは修道女，末娘ヨハンナは，フィレンツェのフランチェスコ１世に嫁いだ。1530年のハプスブルク家令で長子単一相続制ができていた。しかしフェルディナント１世は家令に反し，分割相続させた。フェルディナント１世は，長子マクシミリアンに，オーストリア，ザルツカンマーグート，ハンガリー王，ボヘミア王を，次男フェルディナントに，ティロル，オーストリア西部を，３男カールにシュタイアマルク，ケルンテン，クロアチア，スロヴェニア，アドリア海沿岸国を譲ることにした。1564年，フェルディナント１世が亡くなり，その地位を長男マクシミリアン２世が継ぎ，フェルディナントはティロル大公となり，1567年インスブルクへ移っていった。

ハプスブルク家では，長子相続制が決まっていなかったからである。1713年のカール６世によるプラグマチシェ・ザンクチオンで，原則として長子相続が決まる。



カール５世は，長女マリアと，弟フェルディナントの長子マクシミリアンと結婚させた。いとこ同士である。1548年９月。カールもその結婚式に列席した。

1548年にマクシリアンはマリアと結婚し，その直後から３年間，カルロスのいない間，スペイン総督であった。彼はオーストリアへ帰国後，ルター派に傾いた。彼は新旧両派の和解に勤めた。トレント公会議の決議の公布を拒否した。

1551年カール５世，弟フェルディナント１世，妹マリア，フェリペ２世の４人は，アウグスブルグで長い協議をした。このマリアはネーダーランド総督で，前ハンガリー王妃，ボヘミア王妃であった。皇帝位を交互に継承することをきめた。カール５世・ローマ王は，フェルディナント１世の後は皇帝位をフェリペ２世へ渡すようにと約束させていたが，フェルディナント１世は反古にするわけだった。彼はオーストリア系ハプスブルクの祖になる。カールもフェルディナントも容貌はハプスブルク風で，下顎が豊かだった。

1547年の市民反乱がプラハで起きた。フェルディナント１世は，1547年反乱の後，２つの手を打った。1561年にプラハ大司教座を復活させ，プラハでイエズス会・アカデミーの設立にとりかかった。(14)

1556年ボヘミアにジェスイット派修道院が設立される。1561年プラハ大司教区が再建される。フェルディナント１世は，勅令・信仰の自由を出す。彼は1562年，オスマン帝国との和平を結ぶ。1563年，プラハ最初の本格的ルネサンス的宮殿建築，ベルベデーレ離宮を国王フェルディナント１世が建てる。フェルディナント１世は主にウィーンにいたが，次男フェルディナントをチェコの総督にした。

1562年に息子マクシミリアンはボヘミア王に，同年，ローマ王に，63年ハンガリー王になり，フェルディナント１世はその翌年64年に死んだ。そしてマクシミリアンが２世として皇帝になる。死の前から少しづつ譲っていた。

オーストリア・ハプスブルクとスペイン・ハプスブルクに争いがあって，皇帝位はフェリペ２世でなく，マクシミリアン２世が継いだ。

マクシミリアン２世（1527－1576）

マクシミリアン２世の妻は，マリアで，カール５世の娘，つまりいとこである。

皇帝・国王マクシミリアン２世（在位 1564－76）は，ウィーン生まれで，インスブルックで過ごし，17才で伯父カール５世がその宮廷に呼んだ。スペ

インで教育を受けたが，プロテスタントに寛容になった。マクシミリアンは，スペインでマリアと1548年に結婚した。マリア・フォン・シュパニエンといわれた人である。マリアはカール５世の娘なので，いとこである。彼らの子供たちについて順番に言えば，アンナ（1549－80）は，フェリペ２世の妃になった。何といとこの子である。フェルディナントは早世した。ルドルフ２世が続いた。エルンスト（1553－95）は，ネーデルラント総督になった。エリザベトは，フランス王シャルル９世妃になった。マリーは早世した。マティアスはルドルフの次に皇帝になった。次いで男子が死産した。マクシミリアンが生まれた。アルブレヒトはネーダーランド総督になった。ヴェンツエル，フリートリヒ，マリア，カールは早世した。マルガレータは修道女になった。エレオノーレは長生きした。10人が12歳以上生きた。マリアとマクシミリアン２世は多産であった。２人は宗教上意見が対立した。

1551年にマクシミリアン２世はウィーンへ来る。マクシミリアンは1566年に市内に上水道の敷設を命じた。1526年，都市秩序法が制定され，市民は国王に従属していた。

マクシミリアン２世は，プロテスタントに好意的との噂があった。彼はルター派に共感した。それでフス派は，国内でプロテスタントの存在を公式に認める「チェコの信仰告白」を作り，1575年にこれを提出し，正式承認を求めた。マクシミリアン２世は国王としてそれを受け入れるわけにゆかなかった。「カトリックでなくても自由な信仰を妨げられない」と口頭で宣言しただけだった。

マクシミリアン２世は，学問好きで，語学に堪能だった。プロテスタント好みだったが，父が廃嫡すると言って，禁じられた。だが彼の治世の間，プロテスタントが増える。

フェリペ２世は，フェルディナントの息子マクシミリアン２世のその２人の息子ルドルフとエルンスト，つまりフェルディナントの孫である２人の教育を監督した。マクシミリアンみたいになっては困る，しっかりカトリックであってほしいからであった。彼は1561年にマドリドを首都とした。それま

でスペインの宮廷は移動していた。ルドルフ兄弟が来たのは，1565年であった。

ルドルフのマドリド滞在中にネーダーランド反乱が起きた。マクシミリアン２世は，エグモント，ホールネーの処刑の，助命嘆願をフェリペ２世に頼み，息子ルドルフにもそれを伝えよと手紙を書いた。だが実現しない。

２人兄弟がウィーンへ帰る年，1571年にレパントの戦いが起きた。

フェリペ２世はエリザベトとの間にできた娘イサベルを，ルドルフと婚約させた。

ルドルフとエルンスト，２人の兄弟がウィーンへ帰ると，入れ替わるように，弟アルブレヒト大公とヴェンツエル大公がアンナ大公女とともにスペインへやってきた。アンナは長女で，ルドルフの姉である。彼女はフェリペ２世と結婚するためにやってきた。

エリザベト妃の病死後，フェリペ２世は，このアナあるいはアンナ・デ・アウストリア，つまりマクシミリアン２世の娘と1570年に結婚した。いとこの子である。43才と21才であった。年が随分違う。彼女はフェリペ３世を生む。

パルマ妃，つまり前出のカール５世の庶子が，ネーデルランドの総督として派遣され，1566年，暴動で帰国した。彼女の手には負えないのだった。パルマ妃の後任として，アルバ公が派遣された。

1555年，アウグスブルグの宗教和議がなされた。1555年から1618年のディフェネストレーション（窓外放擲事件）が１つの時代だった。

1565年からマクシミリアン２世はトルコ・スルタンへの毎年３万ドカーテンの貢税支払いを拒否した。またトランシルヴァニアの放棄を要求した。そこでスレイマン１世は激怒し，1566年，10万の兵で再びイスタンブールを出陣した，72才だった，４月末，ハンガリーに進軍し，ハンガリー攻撃をはじめた。マクシミリアン２世は５万の歩兵と３万の騎兵で８月に出陣した。スレイマンの最後のハンガリー攻撃がされた。シゲトヴァールの戦いである。

ところが老スレイマン（1494－1568）はシゲトヴァール城塞包囲の最中，９月５日，陣中で急死する。それは秘密にされ，トルコは城塞を攻撃し，占拠した。そこでさらなる攻撃は辞めた。

1566年，新スルタン・セリム２世は，征服をしなかった，その力がなかった。1568年　アドリアノープルの和約がなされた。セリム２世とハンガリー王マクシミリアン２世の間であり，ハンガリーの長期の分割を認めた。

トルコはかつて初め1529年にウィーン包囲をしたことがあった。後年，トルコは1683年に二度目のウィーン包囲をする。

マクシミリアンは，神聖ローマ帝国皇帝（在位 1564－76）であった。プロテスタントに宗教の自由を認めようとしたが，スペインの反対でできなかった。彼は死に際，カトリックの秘蹟を拒否した。

1569年，教皇ピウス５世は，コジモ１世・トスカナ公を大公にすると勅書を出した。それにマクシミリアン２世やイタリア諸侯は反発した。1570年，教皇はローマで公に大公冠を授与した。

1570年スペイエル協定でヤーノシュ・ジグモントは，ハンガリー王の称号を捨て，トランシルヴァニア公，兼ハンガリー分離地区宗主となった。

1571年に彼が没し，新トランシルヴァニア公にバートリが選ばれた。

1580年スペインはポルトガルを併合した。

マクシミリアン２世の弟フェルディナント大公（1529－95）は，1556年，プラハに金星館を建てる。またこの大公はインスブルックにクンスト・カマーを作った。

アルチンボルドは，フェルディナント１世の宮廷画家だったが，そのまま宮廷画家になる。フェルディナント１世もマクシミリアン２世も，ギリシャ，ローマのコインの蒐集家だった。

マクシミリアン２世は，ヤコボ・ストラーダ（1507－1588）を1557年に引見した。彼はイタリアの画家，建築家，金細工師，骨董商，古代芸術品の目利きであった。1558年からストラーダはウィーン宮廷へ出入りし，1560年，フェルディナント１世により正式の宮廷建築家になった。彼はこうしてマク

シミリアン２世にも引き続き任じられる。ストラーダは宮廷古美術専門家で，建築家である。マクシミリアン２世には宮廷建築家が４人いた。うちピエトロ・フェラボスコは３代仕えた。

バルトロトス・スプランゲル（1546－1611）は，ネーダーランド，ブラバンド公国アントウエルペン出身の画家で，そこで修行した。北方マニエリスムの代表的美術家である。生地ではスプランヘルであろう。ローマに出，マニエリスムを学ぶ。マクシミリアン２世に招かれて1575年に弟子ハンス・モストとウィーンへ来て，宮廷画家となる。その後，ルドルフ２世の宮廷にも仕え，彼と共にプラハに来た。そしてここで没した。３代の皇帝に仕えた中で有名である。代表作は「サルマキスとヘルマフロディトス」c.1580年（ウィーン美術史美術館蔵），「ヴィーナスとアドニス」である。女性の美しさを官能的に描いた。婦像が得意で，優美である。ギリシャ神話の題材が多い。(15)

マクシミリアン２世は，フィチーノの著作を読んでいた。彼は人文主義者だった。彼は古典ローマの文献をよく読んだ。宮廷に多くの学者を招き，子供たちにラテン語を学ばせた。ルドルフとエルンストは，ラテン語作家テレンティウスを読んだ。ルドルフ２世も古典ローマの文献をよく読んだ。

マクシミリアン２世は，娘エリザベトをフランス王シャルル９世に嫁がせていた。フェリペ２世は反対していた。シャルル９世の没後，エリザベトはウィーンに移った。

マクシミリアン２世は，ウィーンの北東70キロ，エバースドルフに館を再建し，ノイゲボイデ（新邸宅）を作る。彼は庭園と園芸が好きだった。

マクシミリアン２世は，宗教対立を何とか調停しようとした。

フェルディナント１世は宮廷楽団を再編した。マクシミリアン２世もそれを充実させた。

マクシミリアン２世は，死ぬ前長い間，病気であった。通風は，カール５世，カレル４世，フランソワ１世，スレイマンがかかっていた。

マクシミリアン２世は，植物学に関心を持ち，植物学者を招く。駐オスマ

ン, オーストリア大使オギエル・ギスラン・ド・ブスベクが, チューリップ, ヒヤシンス, ライラックを, ウィーンに持ち帰った。フランス出身のシャルル・ド・レクリューズ（クルシウス）は, 16世紀の園芸に最も影響力のあった植物学者で, 1573年にマクシミリアン２世の薬園に雇われ, ウィーンにマロニエの木を持ち込み, ブスベクが持ち帰ったチューリップ, ヒヤシンスなどを育てた。オーストリアの鉱山にのぼって調査した。1576年, 次のルドルフ２世の即位後, 解雇され, ネーダーランドに戻り, ライデン大学の教授になる。ライデン大学植物園の設立に尽力し。オランダでチューリップの品種改良をし, オランダをチューリップで有名にする。

マクシミリアン２世はプロテスタントでもなく, カトリックでもなく, が信条だった。

皇帝カレル４世の, 金印勅書1356年で定めた皇帝選挙規定は, マインツ, トリーア, ケルンの司教・大司教と, プファルツ, ブラウンシュヴァイク, ザクセン, ボヘミアの諸侯による選挙であった。

1576年, レーゲンスブルグでマクシミリアン２世が死去し, そこでルドルフ２世が皇帝に選ばれる。ルドルフ２世はボヘミア王だから自動的に１票入る。

ルドルフ２世（1552－1612）

ルドルフ２世はウィーン生れで, ルドルフの母はカール５世の娘マリアである。フェリペ２世の要望と, 母の強い奨めで, 彼は幼少時代, 10代をスペインの宮廷で過した。父マクシミリアンがプロテスタント寄りになったので, フェリペ２世はそれを恐れ, スペインに来させたのであった。12才でフェリペ２世のもとに行った。弟エルンストと一緒であって, 家庭教師アダム・フォン・ディートリヒシュタインに伴われた。この人は後にルドルフの宮内庁長官となり, 彼の有力な側近になる。ルドルフは19才までスペインでイエズス会の教育を受けさせる。そのため, カトリックの影響が強かった。フェリペ

２世は伯父であり，母の兄である。父マクシミリアン２世とその妃マリアはいとこ同士である。ハプスブルクでよくある縁組みであった。ルドルフは後に６か国語ができるようになる。

ルドルフはマクシミリアン１世もカール５世も知っていたから，継承の意味が大きかった。ルドルフ２世は，1572年にハンガリー王になる。といってもオスマン帝国に占領されていたから，一部だった。1575年，23才でボヘミア王になる。この２つの戴冠式をアルチンボルドがデザインした。彼はフェルディナント１世の時代から仕えていた。1576年，ルドルフ２世は皇帝になる。アルチンボルドもそのまま宮廷画家になる。

ルドルフが生まれたのは，マゼラン遠征（1519－22）の一世代後であり，世界の国王たるフェリペ２世の治下である。新大陸が発見され，東洋に達し，世界一周が行われ，地球全体に関心が寄せられた。ルドルフは広く全世界の風物に関心を持った。

ルドルフは，父の死後，オーストリアへ戻った。ルドルフ２世は７年間ウィーンを治める。そして鬱病になる。統合失調症ではないか，とされる。ルドルフも下あごが豊かだった。ハプスブルクの遺伝である。

ルドルフ２世は1578年に大病，胃炎を患った。転地療養で，アルチンボルドらとプラハへ行った。そこでは解放された気分となった。ウィーンはトルコの脅威もあった。そこでひそかに移転を準備する。1583年，ルドルフ２世は，宮廷をプラハに遷都した。33才だった。アルチンボルドも同伴した。ルドルフ２世は，ウィーンよりプラハの空気の方が合っているので，遷都した。ウィーンは因習に捕らわれているのだった。オーストリアの統治は弟エルンストに任した。

ルドルフがウィーンからプラハに移ることは，マクシミリアンの死の時にすでに考えていた。当時は首都概念が違っていた。そしてウィーン近くの町にトルコが攻め込んだ。そしてチェコ人の要請があった。彼は皇帝として，1578－1583年がウィーン，1583－1612年がプラハの時代である。プラハ時代の方が長い。

父マクシミリアン２世は，気さくで，誰とでも打ち解けて話す人だった。ルドルフ２世は，それに較べて口数がすくなく，気難しいとされた。スペイン風だったかららしい。

1600年前後の数年間にヨーロッパでは転換期があった。(16)

この頃，トリエント公会議の存在が大きかった。これは1545から1563年に断続的に開かれた。教皇の至上権が決まり，宗教改革に対抗した。トリエントは現在はイタリアにある。教皇パウルス３世が開き，カール５世が要請した。だんだん反宗教改革的になっていった。ルター主義に反対した。第２期ではフェルディナント１世も係わり，アウグスブルグの和議が成立した。ドイツでの解決であった。全体の結果としてはカトリックとプロテスタントが分裂した。

ルドルフは，世界最高水準の芸術埼品を，そして大航海時代によってもたらされた，珍しい獣物や鳥や草花，望遠鏡，科学技術器機，鉱物，金銀細工を求めた。彼は,芸術と自然の探求に非常に身を入れた。錬金術師の実験室，画家のアトリエ，時計職人の工房が彼の関心であった。これら学問への異常な熱意のため，普通の人間ではなくなった。ルドルフの人格に遺伝的要素があった。８年間のスペイン体験も大きかった。ルドルフはスペインの尊大さを嫌った。ルドルフは，王者の威厳を保とうとした。弟たちにも服従を要求した。臣下にも威信を保った。ルドルフ２世は，ドイツ・ルネッサンスのアルブレヒト・デューラーとティチアーノの作品を入手しようとする。

スペインの従妹イサベラが，嫁の候補に挙がった。だが縁談がならず，ルドルフの弟と結婚する。ルドルフにはマリア・デ・メディチとも縁談あったが，アンリ４世と結婚した。

ルドルフは，ルンプフ，式部長官トララトゾンを側近にしたが，凡庸なので，不満を抱いた。1600年とうとう怒り，宮廷から永久追放した。リヒテンシュタインが宮内長官になった。ボヘミア大貴族は，リジェムベルグ家，ベルンシュタイン家，フラデツ家，ディートリヒシュタイン家，ハルクフ家，ロブコヴィッツ家である。

16世紀後半，帝国行政は，１，ルドルフが連れてきた人びとと，２，伝統的ボヘミア王国行政が，併存していた。官僚組織の頂点には，宮内長官，財務長官，式部長官，軍事長官の４人が居り，中でも宮内長官が重要であった。1576年には古くからのルドルフの傅育官アダム・フォン・ディートリヒシュタインが勤めた。[17] 有力名家はほとんど官僚を出していた。晩年ルドルフは，カール・フォン・リヒテンシュタインを重用した。

プラハに常駐大使が置かれていたのは，マドリド，ローマ，コンスタンティノープル，ヴェネチア，時にパリ。だけだった。この時期，トルコの驚異があった。1591－1606年，ハンガリーでオスマン帝国の攻撃があった。

当時の社会思想としては，フランチ・パトリーツイ（－1597）は，アリストテレス攻撃をし，『新世界哲学』『至福の都』を出す。ジョルダーノ・ブルーノはヘルメス主義による世界改革を考える。イタリアのルネッサンス的全体主義の頂点はカンパネラで，千年王国信仰を持つ。ガスパル・ショッペが1598年にプラハに迎えられた。

1576年のマクシミリアン２世の死の時，ボヘミア王領に約400万人の人口であった。ルドルフが来た時，プラハは人口５万だった。

ボヘミアで1547年にプロテスタントによる反帝国支配反乱がおき，鎮圧された。

チェコ同胞団はルドルフ２世時代に活躍した。カトリックともルター派とも強調しない宗教的急進派だった。ボヘミア王領で再洗礼派が容認され，１万人を越えていた。

ルドルフが君主であった間，ボヘミア王国では住民は長年に亙ってどんな宗教的放埒さもやめさせられなかった。皆が最も望ましい宗教を考え出し，信仰していた。

1576年にカトリックは人口の約10％だった。ルドルフ２世は，徹底的にプロテスタントを弾圧した。そこで反発される。特にハンガリーでであった。やむなく1606年に信教の自由を認めた。しかし1608年にハンガリーで大反乱がおき，弟マティアスにハンガリー王位を譲った。1609年にボヘミアの信教

の自由を認めた。理解者・弟・エルンストが亡くなった。ルドルフ２世は自殺の計画もしたことがある。弟マティアスを憎んだ。ルドルフはマティアスの結婚を認めない。

ルドルフ２世はプラハへ遷都して，錬金術に狂気のようにのめり込む。ブラーエ，ケプラーを雇う。彼は結婚しない。だがもちろん愛人がいた。子はいた。長子は，殺人を犯し，父に先立ち死ぬ。

ルドルフは，ヴンダー・カマー（驚異の部屋）をプラハで作り，これがヨーロッパで代表的なものとなった。彼は教養に富んでいた。多数の芸術家，学者を集めた。ルーランド・サーフェリー[18]（ネーダーランドの画家），ハンス・フォン・アーヘン（1552－1615），アドリアン・デ・フリース，アルチンボルド，植物学者シャルル・ド・レクリューズである。

ルーランド・サーフェリー（1576/8－1639）は，現ベルギーのコルトレイクで，画家一家に生まれた。ハーレムにいた兄ヤーコプの弟子となる。1604年，ルドルフに招かれ，宮廷画家となり，プラハへ行く。鳥獣画を得意とした。皇帝の死後は，主にユトレヒトに住む。オランダのマニエリスム画家である。

ルドルフはデューラーの絵を愛した。

アーヘンは，ルドルフ２世の最もポピュラーな肖像画の書き手であり，前出スプランヘルの影響を受けた。ケルンうまれ，フランドル画家イェリクの門弟になる。ドイツで学び，イタリアへ移る。マニエリスムのヴェネチアに住む。ドイツ芸術界の首位にいるのは，スプランヘル，ヘンドリク・ホリツイウスだった。そしてドイツへ行く。1592年，ルドルフ２世の宮廷画家になる。1601年にプラハに行く。そこでルドルフ２世やマティアスに命令されて画作した。作に「寓話，または正義の勝利」がある。

フリースはルドルフ２世胸像を作った。ルドルフ２世はチェコのガラス工芸を世界的レベルに発展させた。ルドルフ２世のもと，プラハは国際マニエリズムの中心になり，発展した。

ルドルフ２世は，1581年，プラハで宮廷彫刻家としてモストを任命し，彼

はその後イタリアへ帰る。天文学者タデウス・ハイエク（1525－1600）は，フェルディナント１世，マクシミリアン２世の侍医で，錬金術師であり，ルドルフ２世の侍医でもあった。ルドルフ２世は皇帝冠をもう１つ作る。

プラハで1587－1606年，宮廷金細工師フェルメイエンが仕える。他の名工はシュヴァインベルガー，フェアーネン，セムニッツアーである。ルドルフ２世はヒエロニムス・ボッシュを蒐集した。宮廷画家バルトロメウス・スプランヘル(ベルギー出身の画家, マニエリスム), 宮廷彫刻家ハンス・モスト，２人はマクシミリアン２世に仕えた。ルドルフも２人を登用した。

マニエリスム

マニエリスムとは，盛期ルネッサンスと初期バロックの間のイタリアを中心とした全ヨーロッパの芸術様式である，絵画と建築でである。1520年から16世紀末にかけて，ローマ，フィレンツェを中心に，ヨーロッパ全体に広がった。ジョルジュ・ヴァザーリ，エル・グレコ，アルチンボルドらが有名である。錯綜とした空間，非現実的な色彩，幻想的な描写，極度の技巧，作為性を特徴おする。騙し絵も出た。ルドルフの宮廷はマニエリスムの中心となった。

錬金術

錬金術は，化学的手段を使って，卑金族から貴金属を精錬しようという試みである。紀元前のエジプトのアレクサンドリアで起こり，イスラームに伝わった。12世紀にイスラム錬金術がラテン語訳されると，ヨーロッパで研究がされた。錬金術は化学を生み出した。

ヨーロッパの有名人は, アルベルトゥス・マグヌス(c.1193－1280)である。ドイツのシュヴァーベン産まれで，貴族，神学者。パドヴァ大で学ぶ，ドミニコ会員になる。ボローニアで学ぶ。アリストテレスの研究者である。錬金術を実践した。聖人となる。普遍博士，教会博士となる。トマス・アクイナスの師である。パリ大学，ケルンで教える。アリストテレス思想を受け入れ

る。自然学を推し進めた。著作は，『鉱物学』『錬金術に関する小冊子』がある。ヒ素の発見者といわれる。ケルンで没した。

ルネッサンス期の有名人にはパラケルスス[19]がおり，不老長寿薬の発見を目的にした。パラケルスス（1493－1541）は，スイス出身，アインジーデルンに産まれ，オーストリアで基礎教育を受ける。父・放浪の医師から教わる。1510年，バーゼル大学で学び，フェラーラ大医学部に入学，医学博士。医師，化学者，錬金術師，神秘思想家である。大学での学問に失望した。各地を遍歴して学ぶ方が有効だと考えた。生涯放浪した。1516－26年，ウィーン，ケルン，パリ，モンペリエを遍歴。パラケルススを自称した。1524年，ザルツブルグで農民鉱夫連合軍を扇動した。1526年，バーゼル大医学部教授となり，教える。錬金術を研究し，医学に化学を導入した。梅毒など研究し，当時，ユソウボクが梅毒に効果があるとされたが，ないことを明らかにし，それで儲けていたフッガー家を敵に回した。アヘン剤を開発した。エラスムスの治療をした。ラテン語でなくドイツ語で講義をした。1528年，大学を追放された。1541年，ザルツブルグで47才で没した。本名はテオフラトス・ホーエンハイムといい，カトリックである。

錬金術はインドや中国にもあった。錬金術の最大の目的は賢者の石を見つけることだった。ヘルメス・トリスメギストスは錬金術の始祖で，守護神とされた。ヨーロッパ中からプラハに魔術師が集まったが，どれもいかさまだった。

当時有名な錬金術師は，エドワード・ケリーとイギリスのジョン・ディーだった。ケリーはルドルフに呼ばれた。センチヴィも有名だった。ジョン・ディーは，（1527－1608または09）[20]，ケンブリッジ大卒の修士，ルーヴァン大に学ぶ，パリ大で講師，イギリスへ帰国する。水晶玉透視をした。1583年からエドワード・ケリーとポーランド，ボヘミアを遍歴する。

エドワード・ケリーは1555年にイギリスのウスターでうまれ，水晶透視者になった。ジョン・ディーの弟子だった。ディーとともにボヘミア伯ウィレム・ロージェンベルグの保護を受けた。ディーは帰国し，ケリーは裕福に成

り，錬金術師として有名になった。ルドルフ２世は彼を雇い，大量に金を聖餐させようとした。ケリーはなかなか首をふらないので，1591年，捕まえて拘留した。ルドルフは彼が金を作れると信じていた。1594年，ケリーは同意したので，釈放した。しかし彼は当然ながら金の生産に失敗し，また監禁され，脱獄に失敗して死んだ。ジョン・ディー，エドワード・ケリーは，エリザベス１世のスパイだった。ディーは帰国してエリザベス１世に歓迎された。だがその後，ジェームズ１世時代には彼が魔術を嫌ったので，冷遇された。

ルドルフ２世は，世界中からあらゆるものを蒐集した。カルトルッチ一族をプラハによび寄せた。動物園も持った。彼は，プラハ城を増改築する。そのうち，スペイン広間には，蒐集した絵画，新広間は彫刻などが収められた。大航海時代の幕開けで，未知の世界から進取の動植物や珍品を求めた。

対トルコでは外交によって治世の初めの15年は穏やかだった。だが1592－1608年にトルコ戦争があった。1594年にブダとウィーンの間のラープ城塞がトルコに奪われる。将軍ハルデック伯は城を明け渡した。そのため死刑となる。1598年にラープ城を奪還する。

弟エルンストが死んだ。彼も芸術好きで，絵を収集した。彼は1593－95年，ネーダーランド統治をした。

ルドルフ２世は，天文・博物のコレクターで，文化・芸術・科学のパトロンだった。彼は，ヤン・ブリューゲル（父）「陶製の花瓶に生けられた小さな花」を持った。ルドルフは多くの時間をコレクションに捧げた。彼の高い知性，学問の深さと広さ，多くの言語の習得をした。プラハを後期ルネッサンスとマニエリスムの都にした。

プラハの名声は，画家ハンス・フォン・アーヘン，アルチンボルド，彫刻家アドリアン・ド・フリースによって作られた。

アドリアン・ド・フリース（Adriaen de Vries，c. 1545または46－1626）は，ルドルフ２世の胸像を作った。ハーグうまれで，彫刻家，特にブロンズのスペシャリストだった。1601年にルドルフに呼ばれた，プラハのクンス

ト・カマーに作品類を作った。ルドルフの後，マティアスに仕え，その後，シャウンブルグ・ホルシュタインや，デンマークのクリスチャン４世王のもとに勤めた。

ハンス・フォン・アーヘン（1552－1615）は，ケルンうまれ，ドイツで絵を学び，イタリアへ移り，ヴェネチアに住んだ。スプランヘルやホルツイウスの画風に影響された。1588年ドイツへ，1592年ルドルフの宮廷画伯になる。しかし1601年にプラハに移った。作品には『寓話または正義の勝利』がある。

ストラーダの3000巻の蔵書をルドルフ２世は買った。ヤコポ・ストラーダ（1507－プラハ1588）はマクシミリアン２世の宮廷を去った。彼は，イタリアの学者，画家，建築家，文筆家，美術収集家である。息子のオッタヴィオをルドルフ２世は，宮廷美術専門家に任じた。ルドルフは艶福家だった。画家オッタヴィオ・ストラーダの娘カテリーナ・ストラドヴァ（1578－1629）がルドルフ２世の愛人だった。伯爵の身分をあたえられた。長男はドン・ジュリオ，あるいはジュリアス・シーザーである。続いてマティアス（－1619），カルロス（－1650），娘が，ドロテア，エリザベート，カロリーナである。オッタヴィオ・ストラーダは同名の子があり，だからカテリーナはその妹である。彼女はウィーンで教育を受け，15歳でルドルフの愛人になった。

ルドルフ２世は，カタリーナ・ストラーダが愛人だったが，ときおり浮気をした。彼女は，ルドルフのコレクションの管理者，ヤコブ・ストラーダ・オブ・ロスベルグ（オッタヴィオのこと）の娘だった。彼女はルドルフとの間に６人の子をなした。娘２人は修道院へ入り，３人目はコンテクロイ伯と結婚した。息子の１人は1619年に死，もう１人は30年戦争を生き延びた。

ルドルフの長男

悪名高いもう１人の長男は，ドン・ユリウス・カエサル・ドーストリアという。ルドルフは彼に期待し，教育も配慮した。しかし長じてから，コントロールできなくなった。彼は酒におぼれた。ルドルフは矯正させようと努力

したが，無駄に終わった。そこで1606年，オーストリアのカルトジオ派の修道院に投獄した。この攻撃的な若者は，武器の携行を許されず，年所得も厳しく制限され，ワイン一口，ビールとシナモン香りの水しかゆるされなかった。ユリウスはこの厳しい仕組みに数週間しか堪えられなかった。同年11月，彼は贅沢なチェスキー・クルムロフ(21)の城に住み着いた。これはルドルフ２世が17世紀初めにペトル・フォク・ロズムベルクから買った物だった。

ドン・ユリウスは，すぐこの町の恐怖になった。皇帝の庶子が着いて１ヶ月後，地方議会は彼の行動に不平を書いていた，しかし皇帝はたぶんそれを受け取っていないだろう。ドン・ユリウスは狂気であった。チェスキ・クルムロフの風呂屋の娘，マルケタ，あるいはマリエ・ピチレロヴァが彼の愛人になった。この堕落した少年はサディスティックな傾向があった。過激となって彼女を何回も切ったので彼女は意識を失った。それを城の窓から投げ出したが，ガラクタの上だったので，命が助かった。彼女が回復し，もちろんこんな攻撃的敵に会いたくなかったが，ドン・ユリウスは彼女の母を無理強いして，娘を城へ連れてこさせた。1602年２月18日，この若い男は少女を殺し，その身体を切り刻み，棺の中に入れ，自分の手で槌で回りを打った。彼は，愛人を地方の修道院に埋葬するよう命じたが，その血濡れた犯行後４日も洗わず，着物と身体には犠牲者の血がついたままだった。皇帝は断固介入し，城の監獄に彼を入れ，隔離した。そこでユリウスは1609年６月25日に死んだ。(22)

弟マティアスは，気性が激しく行動的で，思慮が浅い。19才の時，ネーダーランドの総督に招聘されたので，なるという。1577年マティアスがネーダーランド総督の座に着こうとして，フェリペ２世は怒った。ルドルフ２世も怒った。78年に就任し，81年まで勤めた。マティアスはうまくゆかなかった。その後はエルンストが勤めた。ルドルフ２世の弟アルプレヒト大公（1559－1621）もネーダーランド総督（1596－1621年）になった。

ルドルフ２世は，ライオンや豹を飼い，毎朝，ライオンに餌を与えた。ルドルフ２世は，別荘として金星館を使った。だがプランダイス城が好きだっ

た。狩猟のためだった。ここへティコ・ブラーエもやってきた。

ルーベンスとヤン・ブリューゲル(ピーテルの次男)とは宮廷画家だった。

マクシミリアン２世の後，ルドルフ２世が引き継いで，ノイゲボイデの建設をつづけるが,完成しなかった。ノイゲボイデに動物園があった。後,シェーンブルンに移る。

ルドルフ２世は国政を大臣に任せていた。彼には政治能力に欠けていた。父がいる時，すでにハンガリーとボヘミアの王位についていた。

ルドルフはチェスキー・クルムロフの城を買った。錬金術師たちがここに集まった。

プラハにペストが広がり始めた時，ティコ・ブラーエとルドルフはプランダイス城へ避けた。

タデアーシュ・ハーイエクは，医師で，天文学者。マクシミリアン２世とルドルフ２世に仕え，チィコやケプラーを招いた人である。ヨハネス・サンプクスは,マクシミリアン２世に引き継ぎ,ルドルフ２世の宮廷修史官となった。

ルドルフ２世が雇った,あるいは頼りにした有名な４人を簡単に見ておく。

ティコ・ブラーエ

ティコ・ブラーエ Tycho Brahe（1546－1601）は，デンマークの貴族に産まれ，長男だったが伯父に育てられる。コペンハーゲン大学に入り，天文学に興味を持ち，トレミーの「アルマゲスト」やコペルニクスの「天体の回転について」を読んだ。ライプチヒ大学へ方角のために転学させられたが，天文学の興味は失せず。伯父がなくなり，自由になる。学友と決闘して，鼻先を切り落とされた。若い頃ある女のことで決闘になり，鼻を失なったが，真鍮の鼻を着けた。占星術を信じた。トルコのスルタンの死をあてて有名に成り，錬金術にも没頭した。新星がでて,「デ・ノバ・ステルス」を書いて評判になる。わざと，貴族の娘でなく，一般の娘と結婚する。デンマーク王フレデリック２世が召し抱えることになり，1576年，ベーン島を与え，ティ

コのために大きな天文台を作った。国王はふんだんに資金を投入した。ティコはそれで観測装置を集めた。ティコは地動説を証明しようとしたが，できなかった。フレデリック２世がなくなり，後継のクリスチャン４世が援助をすくなくしたので，1597年ロストックへ写った。ルドルフ２世をそれを知り，1599年６月，ティコをプラハ宮廷に招いて，ベナッキ城を与えた。ケプラーがティコを訪ねてきて助手になった，あるいはティコが助手としてケプラーを呼んだ。ブラーエは，天文学者，占星術師，錬金術師，作家。ベナテク城を天体観測の場とした。新しい天文台を建設。一年間研究した。ルドルフ２世は，彼をプラハに呼び戻した。プラハで彼が呼んで雇用した助手ケプラーと共同研究した。ティコは月が地球を公転し，惑星が太陽を公転し，太陽は地球を廻るとみた。ティコは望遠鏡を使わずに膨大な観測資料を残した。ケプラーはコペルニクスを正しいとみた。ティコの正確な観測を大いに尊敬した。1600年ケプラーがくる。ティコと同じ宮廷数学者になり，ティコは1601年に亡くなる。

ヨハネス・ケプラー

ケプラー（1571－1630）はドイツ産まれ，家が貧しかった。父は傭兵になった。プロテスタントだった。ラテン語学校，神学校へ通う。テュービンゲン大学神学科へ入り，天文学が面白くなり，プトレマイオスとコペルニクスを学んだ。1594年卒業。グラーツで，数学と天文学を教える教師となった。1596年「宇宙の神秘」を出版し，コペルニクスを全面的に支持する。ケプラーが初めてだった。ガリレオは手紙を送り，賛成した。しかしフェルディナント[23]がグラーツからプロテスタントを退去させることになり，ケプラーは失職した。

ティコはケプラーを呼んだ，あるいはケプラーがティコを訪れた。これでケプラーはティコの元で助手あるいは共同研究者となり，ルドルフ２世に宮廷付き占星術師として仕えることになった。ティコの死後，ケプラーはティコの観測結果を整理した。1609年「新天文学」を出した。

ガリレオは「星界からの報告」1610年をルドルフに献上した。それをルドルフ２世はケプラーに貸した。ルドルフ２世の買った望遠鏡をケプラーに貸し，彼は天体望遠鏡を作った。『ルドルフ表』をケプラーは後に完成し，1627年に出版した。(24)

リヒテンシュタイン

リヒテンシュタイン侯は，14世紀からハプスブルクに仕えた。

ルドルフ２世は，リヒテンシュタイン家のカールを1599年から1607年まで宮廷長官（Chief Intendant）に任命した。1608年に侯爵にし，カール１世侯となる。リヒテンシュタイン家もクンスト・カマーを作った。カール１世（1569－1627）は，ジュネーヴに学び，1588年にフランスで研究旅行をした。

リヒテンシュタイン家は12世紀にシュヴァルツエンベルグ家のハインリヒがウィーン郊外にリヒテンシュタイン城をたてた。ウィーンのメートリングに城があった。

1156年以前，フーゴ伯がリヒテンシュタイン城の継承者になる。バーベンベルグ家に仕える。1276年オーストリアがプシェミスル家からハプスブルクになり，リヒテンシュタインはハプスブルクに仕える。南メーレンに居城を持った。その後，系統は絶える。

14世紀終り，ヨハン１世がハプスブルクのアルブレヒト３世に仕える。15世紀前半，ハプスブルクのアルブレヒト５世にヨハン２世は懲罰を受ける。15世紀半ば，懲罰がとり消される。リヒテンシュタイン家はハプスブルクからモラヴィアやボヘミアに領地を与えられた。またルドルフ２世により，1608年に侯の位を与えられた。

カール１世侯（位 1608－27）と息子カール・オイゼビウス侯（位 1627－84）が美術品の収集をした。ルドルフ２世はリヒテンシュタイン家のコレクションを絶賛した。リヒテンシュタイン家は1719年に自治権を得た。初代カール１世（1569－1627）は，モラヴィアうまれ，プロテスタントからカトリックへ替わった。ウィーンで，ルドルフ２世，マティアスに仕えた。ルドルフ

２世の最高宮内長官，顧問官になった。カール１世はワイセンベルグの戦いでフェルディナント２世の側に付いた。そしてボヘミア貴族27人の処刑を行った。1622年にフェルディナント２世により，ボヘミア領事に任じられる。1623年フェルディナント２世により，帝国諸侯身分になる。プラハで没した。リヒテンシュタインの首都はファドゥツである。ウィーンに夏の宮殿がある。(25)

リヒテンシュタインは，カトリック改宗者，経済面で抜群の眼識をもった。晩年のルドルフに影響力をもった。ルドルフとマチアスが対抗した時，彼はマチアスに寝返った。

ジュゼッペ Giuseppe・アルチンボルド

1525年，アルチンボルドは，ミラノで生まれた。父は画家でピアジョという。

美術（建築と絵画）史では，ルネッサンス→マニエリスム→バロックとなり，彼の時期はマニエリスムである。

ミラノではレオナルド・ダ・ヴィンチが活躍していた。ミラノにダヴィンチの影響があった。なにしろレオナルドは20年以上ミラノにいた。アルチンボルドの時代で有名なミラノ出の画家はカラヴァッジョ(26)である。カラヴァッジョはダ・ヴィンチを学んだ。アルチンボルドはマニエリスムの画家であるが，カラヴァッジョはマニエリスムを学ばなかった。彼からバロックがうまれる。

アルチンボルドはミラノ大聖堂のステンド・グラスをデザインした。

1562年，神聖ローマ帝国皇帝フェルディナント１世の宮廷画家として，成功を求めてウィーンへ行く。おそらく長男・大公マクシミリアンの要請である。36才だった。宮廷では絵だけでなく，装飾や衣装も式典もデザインをする。

アルチンボルドは，野菜や魚，木や石，果物や花，本，などを寄せ集めて，人間の姿に見えるように描いた「寄せ絵」で有名である。1563年，「王の画家」

といわれる。『四季』連作を，マクシミリアンのために作る。ウィーン時代に寄せ描きをかいた。独創ではない。1564年，フェルディナント１世が没し，マクシミリアンが２世として皇帝位についた。彼は，1566-7年一時，イタリアに帰国した。

マクシミリアン２世の長男ルドルフは，1572年にハンガリー王になる。1575年，23才で，ボヘミア王になり，この２つの戴冠式を，アルチンボルドがデザインした。

アルチンボルドは1569年,「４大元素」をマクシミリアン２世に献上した。彼は大いに気に入った。くり返しコピーを描かせ，４つのヴァージョンがある。アルチンボルドには確かな技術と遊び心がある。1573年にも「四季」シリーズを作る。

1576年，マクシミリアン２世が没した。アルチンボルドとマクシミリアン２世は同年だった。息子ルドルフが神聖ローマ帝国皇帝となる。

1578年，ルドルフ２世は大病を患った。胃炎だった。転地療養で，アルチンボルドらとプラハへ行く。そこで解放された気分となった。これでひそかに移転を準備する。アルチンボルドも才能が解放されるように感じた。

1580年，彼はルドルフ２世から貴族の称号を受ける。皇帝は彼に1550グルデンの報奨金を出す。

1583年，ルドルフ２世は，宮廷をウィーンからプラハに移す。アルチンボルドも一緒した。1587年，アルチンボルドは60才になったので，故郷に帰した。彼はウィーンとプラハで合計25年勤めた。プラハを去り，ミラノへ帰った。大いなる名声と富を得た。そこで伝記を書かせたりした。

「庭師・野菜」は，上下絵である。つまりひっくり返しても絵になる。1589年，ルドルフ２世に『フローラ』を送る。

1591年,「ウェルトゥムヌスとしての皇帝ルドルフ２世」で，ルドルフを描いた。ウェルトゥムヌスとは，古代ローマの豊穣の神の名であり，ルドルフにこれを送った。[27] ルドルフ２世は喜んだ。ミラノに帰って３年後だった。その，花，野菜，果実は，オスマン帝国から持ち帰った珍しいものである。

もろこしは，メキシコ原産であり，コロンブスがヨーロッパに伝え，オスマンで大規模に栽培された。

1592年，彼はルドルフ２世から宮中伯の称号を得る。1593年，腎結石でミラノで死す。彼はマニエリスムの代表者であった。(28)

ルドルフ２世は，ラビ・レーウ師と会う。呼んで話を聴く。ユダヤ居住区の彼の家にも行った。イェフダ・レーヴ・ベン・ベザレル（1525－1609）といい，プラハの神秘思想家だった。ゴーレム伝説の主人公である。ポズナニに生まれたらしい。父もラビだった。1553から1588年までモラビアの首座ラビになった，88年にプラハに来て，ラビに就任した。1592年にルドルフ２世もいれて説教をした。1592年にポーランドの主席ラブになった。晩年プラハに戻り，亡くなる。墓がユダヤ人墓地にある。

ユダヤ人豪商マイスルは，対トルコ戦費を援助した。プラハには13世紀に中欧最大のゲットーがあった。プラハの中世期に人造人間ゴーレムの伝記が生まれた。自分で動くドロ人形で，ラビが作る。

ネーダーランドのルーカス・ファン・ファルケンボルヒの２枚の絵は，エルンストが入手し，ルドルフ２世に渡った。

ヨーロッパ中から学者や芸術家がプラハに集まった。プラハは後期ルネッサンスの中心となった。ネーダーランドのルーランド・サヴェーリが初めて生物画を板絵で描いた。ルドルフ２世の宮廷画家であった。

ボクスカイの本が1560年代に，フェルディナント１世に捧げられた。その写本にだまし絵による装飾が，ゲオルグ・ホフナーゲルによって1594－６年に作られ，ルドルフ２世に捧げられた。ホフナーゲルはネーダーランドの画家で詩人で人文主義者だった。1594年にもう１つの写本に装飾がつくられた。

ルドルフ２世は知的な才能があった。若い時，政治判断が的確だった。しかし精神的錯乱に時々おそわれるようになった。ルドルフのコレクションは，一部は30年戦争で略奪され，一部はウィーンに持ってゆかれ，あとはプラハに保管された。

マティアスは1578年ネーダーランド７州に統治者として招かれた。フェリペ２世は認めない。1581年まで留まった。かつて1593年兄により，オーストリア総督に任命されたことがある。

ルドルフ２世は1606年, ハンガリーで穏健化のため, 信教の自由を認めた。1608年に弟のマティアスに譲った。ボヘミヤ王位は譲らなかった。1607年ウィーンでマティアスを宗主とする密約ができた。1609年チェコのプロテスタントはその機会を利用してルドルフ２世への支持の引き替えに，1575年の「チェコの信仰告白」を承認させた。ユダヤ人も保護する。

ルドルフ２世の甥パッサウ司教レオポルトが，プラハ占領を企てた。チェコの貴族はルドルフ２世を見限った。ルドルフ２世はスペイン育ちにも拘わらず，宗教的には寛容政策をとった。だが政治や宗教にはあまり手をふれなかった。

ハプスブルクの兄弟争いが起きた。弟マティアスが支配権を望み，これを否定されてからだった。ルドルフに子がないので，後継者を決めるよう弟が迫った。弟マティアスとの関係は最悪だった。

1592－1606年にはトルコ戦争だった。1606年の講和でトルコとオーストリアが対等になる。そして献納金もなくなる。

トランシルヴァニアとハンガリーにドイツ人とプロテスタントが多い。オーストリアの軍政官がハンガリーでプロテスタント弾圧をしたので，プロテスタントのイシュトヴァン・ボチカイが反旗を翻す。オスマン帝国はこれに乗じ，スルタン・アフメト１世はボチカイを王と認める。しかしボチカイは王冠をオーストリアに返還した。

マチアスらはボチカイとの講和を主張し，交渉し，1606年，ボチカイとウィーン和約をした。マチアスは1608年，ハンガリー王になる。ルドルフ２世の政策に不満を抱いた弟マチアスが，ハンガリーやモラヴィアの貴族を味方につけて，軍隊を率いて1611年にプラハに迫った。マチアスは，プラハに入ってレオポルトを追放し，マチアスは王に選ばれた，彼は寛容政策をとらない。兄を帝位からひきずり降した。ルドルフ２世は，弟マティアスに幽閉

され, ボヘミア王位を譲る。ルドルフにはプラハ城だけ与えられた。1612年, 同年マティアスは皇帝になる。マティアスは宮廷を再びウィーンに戻す。

ルドルフ２世は，1552年生まれ, 没1612年だが, 皇帝として1576－1612年, ローマ王として1575－1576年，だから２年で皇帝になる。ローマ王はやめている。ハンガリー王は1572－1608年で，1608年にハンガリーで大反乱がおき, 途中でやめて，弟マティアスに譲った。ボヘミア王は1575－1612年で，皇帝になる１年前になっている。ルドルフ２世は1612年に没した。マティアスは兄の葬儀を執り行った。

トランシルヴァニア公国の貴族ポチカイ・イシュトヴァン（1557－1606）やベトレン・ガーボル（1580－1629）は，ハプスブルクに抵抗し，トランシルヴァニア公国を維持した。1604年，ポチカイ・イシュトヴァーンはハプスブルクに対して反乱する，1606年トランシルヴァニア公に即位し，06年まで在位した。

1613年，ベトレン・ガーボルがトランシルヴァニア公に1629年までなる。

結び

モハッチの戦い（1526年）で，ラヨシュが戦死し，それ以前に２重の結婚がされていたことは，ハプスブルクにとって非常にに大きなことであった。東では単にオーストリア国主であった同家が, 帝国に発展する前提になった。

ハプスブルク家第１代ルドルフ１世も，オーストリアとボヘミアの支配者にはなったが，後が続かなかった。モハッチの戦い以降の進展が重要であった。また勿論マクシミリアン１世は，東方帝国が出来るだろうとは考えもしなかっただろう。

注

(1)　江村洋『中世最後の武士』中央公論。

⑵　ミラノ公。残忍な圧制者（1444－1476），２人目の妻との間に３人の子，そして庶子たち，愛人との間に庶子４人を作る。
⑶　西川『狂女王フアナ』採流社。
⑷　江村洋『カール５世』河出文庫。
⑸　ヨーロッパ中世で，距離が遠かったり，来られなかった場合，新郎でなくその縁者が代理の婿役を演ずる。この時は祖父マクシミリアン１世が演じた。
⑹　マルゲリータ・ダウストリア（1522－1586）。初め，フィレンツェのアレッサンドロ・メディチと1536年に結婚，だが彼が暗殺され，1538年，パルマ公オッターヴィオ。ファルネーゼと結婚する。ネーダランド総督として1559－1567年まで勤める。オランダではパルマ公妃マルハレータとして知られる。
⑺　三橋富治男『オスマン帝国の栄光とスレイマン大帝』清水書院　1984年。
　アンドレ・クロ『スレイマン大帝とその時代』法政大　2000年。
⑻　Das Konigreich Ungarn 1526-1918. Univ. of California Press 1974.
⑼　Robert A. Kann, The History of Habsburg Empire.
⑽　ヤーノシュ・サーヴァイ『ハンガリー』白水社　1999；南塚信吾『図説ハンガリーの歴史』ふくろうの本；パウル・レンドヴァイ『ハンガリー人―――光と影の千年史』信山社；『東欧史』山川出版社
⑾　西川和子『スペインの貴公子フアンの物語』彩流社
⑿　西川和子『オペラ「ドン・カルロス」のスペイン史』採流社
⒀　拙稿「ウィレム・ファン・オランエ」。ヴェロニカ・ウエッジウッド『オラニエ公ウィレム』文理閣
⒁　エヴァンス『魔術の帝国－ルドルフ２世とその世界』筑摩書房，1988年　p.47
⒂　その他代表作は,「ケレスとバッカスと凍えるヴェヌス」「アポロンとミューズ」「グラウコスとスキュラ」「オデュッセウスとキルケ」２つある，「ヘラクレスとオムパー」「ヴァルガンとマイア」「ヴェヌスとメルクリウス」「メルクリウスに見つかったヴェヌスとマルス」「ユピテルとアンティオペ」「アンジェリカとメドーロ」「キリストの洗礼」「ヴァルガの鍛冶場のヴェヌス」など，ウィーン美術史美術館に多くが所蔵されている。
⒃　拙稿
⒄　エヴァンズ，p.54
⒅　作品は「鳥の居る風景」（1628年　ウィーン），「農家の庭」（1610年　プーシキン美術館），「ブーケ」（1624年），「ドードー」（1624年），「荒野のエリア」（1625年）。
⒆　彼の邦訳と研究書は，『自然の学』人文書院　1984年，『パラケルススと魔術的ルネサンス』勁草書房　2013年，『パラケルススとその周辺』白馬書房　1987年，種村季弘『パラケルススの世界』青土社　1966年，『パラケルスス』人文書院　1984年，野田又夫の本にも出ている。
⒇　ピーター・フレンチ『ジョン・ディー　エリザベス浅野魔術師』平凡社
㉑　プラハから南，ブルタバ川そいの町。
㉒　Petr Corney, Great Stories in Czech History. Prah 2005
㉓　フェルディナント大公である。マクシミリアン２世の弟。フェルディナント１世とアンナ・ヤギエロとの間の次男。二番目の結婚で，姪のアンナ・カテリーナ。ゴンザーガと結婚し，その娘アンナが皇帝マティアスの皇后になった。
㉔　アーサー・ケストラー『ヨハネス・ケプラー』ちくま学芸文庫。

ヴォールケル『ヨハネス・ケプラー』大月書店。
ギルダー『ケプラー疑惑』地人書館。ハンヴィル『ケプラーの憂鬱』工作舎。
(25)　『リヒテンシュタイン　華麗なる侯爵家の秘宝』朝日新聞社，東映2012－13年
(26)　『カラヴァッジョ伝記集』平凡社。
(27)　これは現在スウエーデンのウプサラ，スコークロステル城にある。かつてスウエーデンがプラハを攻め，この絵を奪ったからである。
(28)　『アルチンボルド展』国立西洋美術館　2017年。

注以外の参考文献

カウフマン『綺想の帝国』工作社　1995年
伊藤哲夫『神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ２世との対話』井上書院
『チェコスロヴァキア史』クセジュ　白水社
森洋子「リヒテンシュタイン侯爵家コレクションの２人の偉大な立役者」
『ルドルフ２世の脅威の世界展』文化村　2017年
薩摩秀登『物語　チェコの歴史』中公新書　2006年
ピエール・ボヌール『チェコスロヴァキア史』白水社　1969年
ペトル・クラール『プラハ』成文社　2006年
Eliska Fucikova, Prague in the reign of Rudolf II, Prague 2014
Peter Marshall, The Mercurial Emperor. London 2007
マイオリノ『アルチンボルド』ありな書房
フランセス・イエーツ『薔薇十字の覚醒』工作舎。同『魔術的ルネサンス』晶文社
『プラハ』Vitalis 2018
『リヒテンシュタイン　華麗なる侯爵家の秘宝』朝日新聞社，東映　2012－13年
川上恵理「ルドルフ２世の宮廷におけるローマの擬人像」（神戸大『美術史論集』2015年）
同「同時代からみるルドルフ２世のクンストカマー」同18
同「神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ２世の1595年の勅書による周辺国ギルドへの影響」同17
同　「ルドルフ２世治下のプラハにおける芸術運動」『鹿島美術研究』33
『神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ２世の脅威の世界　展』文化村　2017
『リヒテンシュタイン侯爵家の至宝展』ＴＮＣプロジェクト　2019－20
アレクサンドル・コイレ『コスモスの崩壊』白水社,『閉じた世界から無限宇宙へ』みすず書房
速水敬二『ルネサンス期の哲学』筑摩書房
Rossella Vodret, Caravaggio. l`opera completa. Milano 2009
シューメイカー『ルネサンスのオカルト学』平凡社
シルヴィア・フェリーノ＝バグデン「アルチンボルド」（『Arcimboldo アルチンボルド展』国立西洋美術館　2017年）
『ハンガリー史』１．２．（仏訳も参照している）Pamleni hrsg., Geschchte Ungarns.
G.A.MaCartney, Geschichte Ungarns, Stuttgart Berlin Koeln Mainz 1971